

地層処分セミナーin 静岡 開催結果

日 時：2017年2月11日（土・祝）13:30～16:30

場 所：ニッセイ静岡駅前ビル 2階会議室（静岡県静岡市）

主 催：原子力発電環境整備機構（NUMO）

後 援：経済産業省・資源エネルギー庁、日本経済団体連合会、日本商工会議所、経済同友会、
全国商工会連合会、電気事業連合会、中部電力株式会社

参加者数：46名

プログラム：

（1）映像（DVD「地層処分とは」）

（2）説明 専門家、NUMO職員

■専門家（敬称略）

阪原 晴海（浜松医科大学教授）

小山 倫史（関西大学社会安全学部准教授）

（3）質疑応答（主な内容）

Q. 科学的有望地の公表はいつか。

A. 科学的有望地の公表は、国が昨年末に公表する予定であったが、まだ国の審議会で検討中であるため、公表時期はわからない。

Q. 300m以深の根拠は何か。300mでは浅い気がする。3000mくらい深く掘ったほうが良いのでは。

A. 人間の生活環境に影響のない深さや諸外国の例を参考とし、300m以深と決定された。300m以深なので、500mになるのか、1000mになるのかは、調査の結果、安全に処分できる岩盤がどこにあるかで深さが決まる。なお、深ければ深いほど良いというわけではなく、深すぎると温度が上昇する等のデメリットがある。

Q. 埋めた場所に地下水が流れて来たらどうなるのか。

A. 万一、放射性物質が地下水に溶け出した場合もシミュレーションにより影響を把握し、人間の生活圏に悪影響がないことを確認している。処分場の建設地決定までには、ボーリング調査等で地下水の流れを把握する。調査は20年間かけてしっかり調べる。

Q. ガラス固化体の放射能が短期間で急激に下がるとの説明があった。どの位の期間なのか。

A. 高レベル放射性廃棄物に含まれる主な放射性物質であるセシウム 137 とストロンチウム 90 は半減期が約30年であり、最初の1000年間で放射能レベルは急激に下がる。その後は緩やかに下がり続けるが、ウラン鉱物と同様のレベルまで下がるには数万年単位の時間を要する。このため、人の管理が要らない地層処分という方法が選ばれている。これは、世界共通の考え方である。

Q. 輸送手段の安全策はどうか。

A. 六ヶ所村から地上処分施設へ輸送する際には、最寄りの港湾設備まで海上輸送し、陸揚げ後は専用道路により搬入する予定のため、公衆被曝のリスクは低い。わが国ではこれまでに2,300本輸送した実績がある。また、輸送船は二重船殻構造や二重操舵システムを採用し、また、輸送容器は落下しても、高温に晒されても、海水中に落下しても、十分耐える性能を有するなどの安全対策を施している。これらの技術はすでに国内外で実用化されている。

Q. 地下では酸素がないため金属の腐食は進まないとか、化石として残る等説明されているが、そのようなところはごく一部であり、大半は溶けてなくなってしまうのが事実。それなのに普遍的に安全と言い切れるのか。

A. 地層処分を行う300m以深の岩盤では酸素濃度が低いため、金属等の腐食が進行しづらいのは確かである。このほか、地下水の酸性・アルカリ性なども金属の腐食に影響するが、これは地点ごとに異なるため、調査を進める中で評価していく。

Q. ロンドン条約とはどのような条約か。

A. 海洋汚染の防止を目的した国際条約である。

Q. 事業に関する責任の所在はどこにあるか。

A. 私どもNUMOにある。

Q. 若者向けに、どのようなPR活動を実施しているのか。

A. ジオ・ミライ号という移動展示車で全国の科学技術館を巡回するイベントを開催している。2月は25～26日に浜松科学館で開催予定。他には、大学や高校への出前授業、教育関係者を集めたワークショップ開催、ユーチューブなどWEB広告の実施など、若者向けのPRに力を入れている。

Q. マスコミへの情報提供が重要ではないか。

A. おっしゃるとおり。日常的にマスコミ関係者への情報提供に努めている。本日のセミナーもマスコミに公表している。引き続き、地層処分についての情報を発信したい。

○その他意見

- ・リスクとしてどのような事象を考えているのか、具体例を示して、その対策について説明すべき。
- ・自治体が手を挙げるのを待っているだけだったり、理解が進んだところに国が申し入れるというやり方ではこの事業は進まない。国が「ココ」という場所を複数ヶ所選定し、積極的に申し入れていくべきではないか。

以 上